

孤立した若者のエンパワーメント ～心の回復、社会参画から定着支援まで～

特定非営利活動法人 とちぎユースワークカレッジ

(2013年、2014年、2015年 実践助成)

話し手: 横松陽子さん (とちぎユースワークカレッジ 理事長)
大山園子さん (アイ・こころのクリニック 精神保健福祉士)



左から 大山さん、横松さん

●何故この活動に取り組もうと思われたのですか？

横松 リーマンショック直後に、ある NPO が若者の緊急雇用対策としてコミュニティカレッジ事業を県に提案したのですが、運営スタッフがいませんでした。タウン誌の編集長や専門学校の講師をしていたこともあって私に声がかかり、事務局として関わりました。

2年半で補助金が打ち切れ、事業が終わりという時に、目の前の子たちを放っておけない、と自分で NPO を立ち上げました。その時点で、出会ったニートやひきこもりの若者たちの声に耳を傾け、彼らが社会に出るために何が不足しているのかということを考え、一定の効果が得られるプログラムをほぼ確立していました。

現在、高校卒業くらいの年齢から 40 歳前までの、学校に行っていない、働いていない、孤立した状況の若者を支援しています。多くは心療内科に通院していて、人が苦手であったり、ひきこもりの状態にあることが共通点です。週に 3 日、クリニックに設けられた若者支援のための教室に 9 時半に集まり、終日プログラムに従って活動するのが特徴です。私たちは、単に居場所を提供するのではなく、グループ活動にこだわっています。

プログラムには芸術的な活動が多いですが、最初の段階で、人は一人ひとり自分らしく生きていいのだということ、頭で理解はしていても本当には分かっていない子たちの中に染み込ませたいと思っています。言葉以外の部分で互いの違いを知り、違っていいのだと繰り返し確認することで、安心して自己開示できる状態をつくり出します。他にも、街歩きや身体表現のプログラムがあります。

言葉中心のカウンセリングだけでなく、彼らの心と体の全体状況を把握し、支援に活かしたいと思っています。

「無縁社会」という言葉に象徴されるように、人と人とのつながりが希薄になり、様々な理由で孤立する人が増えています。中でも若者の社会的孤立は 70 万人に及びます。とちぎユースワークカレッジでは、スポーツイベントの企画運営により、孤立した若者をエンパワーし、社会的自立に結び付けています。代表の横松陽子さんと精神保健福祉士の大山園子さんにお話を伺いました。

支援プログラムは半年が一つのクールで、成果を確認しながら継続していきます。今までの実績では、毎年 20 名前後を支援し、約 1 年半で参加者の約 7 割が就労しています。小学生の時から 10 年以上不登校という子も働けるようになっていきます。また、就職した後も辞めずに働き続けていることが特徴です。

ヤングスポーツフェスティバルは 7 年前からやっています。きっかけは、他の団体から県内の若者向けの運動会の運営を託されたことです。体育教員の夫に相談しながら、若者たち自身に運動会を企画してもらい、開催しました。やってみたら、個人個人の課題がすごく見えます。この子はこういうことが苦手だとか、長けているとか。また、行事を通してとても成長するんです。これは絶対に続けようと思いました。

●活動の成果や課題についてはどうですか？

横松 ヤングスポーツフェスティバルは春の運動会と秋の球技大会の年 2 回ですが、自分たちだけでなく、参加した他の団体の若者や支援者がすごく良かったと言ってくれます。学校行事の無い通信制高校の子たちが、卒業式の答辞で一番の思い出として話すんです。このように社会に貢献できるのは素晴らしいことだと感じます。

若者に内在している力をいかに引き出すかがヤングスポーツフェスティバルの目的なので、彼らを信じて企画そのものを任せます。支援者は負荷がかからないものを提供しがちですが、力のある子には、課題を与えるために手厳しく返すこともあります。客観的にきちんと説明



企画から運営まで若者たちが主役





真剣勝負!

して一緒にいいものをつくろうと投げかけると、自分の力を最大限出そうとやる気が出てきます。

長い間不登校だった子は、自分ができるかできないかも分からず怖いという状態でした。他方、高学歴の子はやらなければならないことはやろうとしますが、正解の無いものが苦手です。フェスティバルの企画作りでは、型にはまらない不登校の子がアイデアを出し、高学歴の子がそれを文章化したりと、個性を活かして取り組みます。良い企画を作るため、お互いをリスペクトしながら結束力が生まれています。

きっとできると励ましながらやらせると、できるんだという自己肯定感につながります。支援の最終着地点は、再び一人になることを選ばないことです。ヤングスポーツフェスティバルは一人ではできない、皆とやることで頑張れるものです。人とのつながりが大切だという記憶が心に留まることが重要です。一生懸命準備すると、当日、何より心が大きく動くんです。わっと心の底から喜べる瞬間があると、見たことの無い表情をするんです。

●スミセイの助成金はどのようなことに役立てられましたか？

助成は審判の謝礼や会場費に充てられるので有難いです。秋にインディアカをやった時は、全員で楽しめるように独自ルールをつくりました。その際に審判の方に相談したのですが、謝金を支払えるので協力を得やすかったです。ヤングスポーツフェスティバルを続けてきて、大勢の方に協力いただいています。ひきこもりの子の相談を受けたり、彼らに対する偏見を解消する場にもなっています。また、県内の大学や、市の若者支援の部署だけでなく、政策部門の方が関心を持って見学に来て下さることもあります。

●今後の展開やビジョンについてはどのようにお考えですか？

横松 若者支援に限らず色々な団体に参加の声掛けをしようという話があります。他に、運動会の企画運営のノ

ウハウを地域に提供するという案も出ています。運動会をやるには地域の人を巻き込まないとできないし、自分たちの活動を知ってもらうことも、ひきこもりの子への社会理解も進みません。将来的には、若者が働く場、収益を得られる場をつくりたいと思っています。職業体験のような中間的就労をやっている事業主はありますが、仕事の内容や量が企業の都合で決まってしまうのが課題だからです。

大山 今年度は厚生労働省のモデル事業で、クリニック、若者支援団体、ハローワーク、障がい者職業センター等が連携して全体で支援する体制をとっています。定着支援が無いと約7割の人が戻ってきてしまうので、就職後も、いつでも相談に乗れる体制をとっています。

ここの若者支援プログラムは人と関わりを持つように組まれているので、大きく変化が見られました。水も飲めないぐらい緊張していた人が、積極的に発言して人が変わったようになりました。自ら関わろうとする主体性が生まれ、オープンな関係性、信頼関係が構築されてきました。日誌の感想にも前向きなコメントが増えました。

ヤングスポーツフェスティバルに向き合う時の結束力やパワーはすごかったです。心理検査でも社会性等の数値が改善し、自信が付いて堂々としてきました。今後も、このプログラムを継続していきます。

<インタビューを終えて>

運動会の開催日に雨が降った時、準備を頑張った不登校の子が朝一番に来て「今日はやりますよ」と言ったそう。彼女にとって20年振りの運動会だったという。若者たちは、びしょぬれになりながら笑顔で運動会をやりきった。その後、彼女は働いて、初めてお給料をもらった時には母親が泣き出してしまったそう。

とちぎユースワークカレッジでは、プログラム全体を通じて若者たちの心の扉を開き、彼らの内側にある力を引き出していくよう働きかける。フェスティバルの企画案に何度もダメ出しされながら、初めは支援を期待していなかった子たちが、積極的に発言し、自ら変わっていく。そして迎える当日。心から楽しんでる姿を見ると、スポーツの力を実感するそう。

学校に通わず、働いたこともない若者の孤立は社会問題化している。一方で、ひきこもりやニートへの偏見は根強く、自己責任や家族の問題として考えられがちだ。この活動は、彼らの人や地域との絆を取り戻すために、第三者が提供できる学びと体験の場のひとつとして、スポーツを上手に活用した素晴らしい試みである。

[インタビュー・2016年8月26日(金)於:アイ・こころのクリニック(栃木県宇都宮市) 文責:帝京大学冲永総合研究所 谷本都栄]

—団体概要—

特定非営利活動法人 とちぎユースワークカレッジ
(栃木県宇都宮市)

働く能力がありながらも、人間関係や経験不足による不安から就職できない若者たちを対象に、通所型支援事業、相談事業を実施している。また、若者の社会的孤立の予防と解消、子どもや若者の社会的自立に貢献することを目的に、支援者育成事業にも取り組んでいる。<http://www.youthworkcollege.jp/>

※冒頭の写真以外は団体提供